



ひろしま

郵政産業労働者ユニオン
 広島支部(広島郵便局内)
 支部メールアドレス
piwu_hiroshima@yahoo.co.jp

意味のない 安全唱和にNo

輸送部では4月28日から、郵便部では5月1日から体操・互礼・周知後に安全唱和を実施するようになりました。

1. 左手を腰に
2. 右手の甲を外側に
3. 肘を伸ばして
4. 構えて

「安全最優先の業務を実践し、事故・災害を根絶しようヨシ！」と唱和するというものです。所作も事細かく決められ、まるで軍隊のようです。はたしてこの唱和を行うことで、事故や災害を根絶できるのでしょうか？

■安全な業務運行のために

広島局では開局以降、安全・確実に業務を遂行するための作業手順やマニュアル等が未だに作成されていない状況です。

広島局で新しく採用された期間雇用社員や、他局から異動してきた社員の中には「教える人により作業手順が違う」と戸惑いの声を漏らす社員もいます。

そのような状況の中で会社は、唱和の文言にある「**安全最優先の業務**」とはどういう作業を行えばよいのか、を具体的に示す必要があります。

■唱和に意味はあるのか？

このまま唱和のみを繰り返していても社員ごとに作業手順が異なる恐れがあり、安全意識の共有は難しく、唱和を行うこと自体が無意味であると言わざるをえません。

また「指差し呼称の効果」として、誤りの確率が6分の1になる、という鉄道総合技術研究所の記事が業務周知用ホワイトボードに張付されていますが、これはマニュアルに基づいた作業一つ一つを確実に実施した「確かめ」としての指差し「呼称」であり、スローガンを指差し「唱和」することは本質的に違うものです。

■唱和していても・・・

先日郵便部で、鉄パレットの底板が十分に取り付けられておらず、パレット移動中に外れそうになった事案がありました。

指差し安全唱和を行うよりも前に、パレット組み立ての正しいやり方や安全に運搬するやり方を研修させることの方が重要です。

「指差し唱和」を考える

唐突な指差し唱和

5月、突然の感が否めない「指差し唱和」が開始された。管理者を中心に多くの人事異動がなされ一ヶ月あまり、顔と名前がなんとか覚えることができた次期に。

何故今更、何故今の時期に、何をしたいのと思わざるを得ない。一方的なトップダウンの取り組みに違和感すら覚える。

ソーシャルディスタンス

周知の場所が変更となった。深刻な新型コロナの影響で職場でもソーシャルディスタンスとマスクの着用、マイクによる周知とその新型コロナに対する対処を職場でも実践し、社員にもその驚異への意識付けしてきた。一定程度評価するものがあった。

しかし、その全てが「指差し唱和」を行うためだけのものならば残念でならない。社員を監視できる位置に移動し、スローガンを掲げ、「指差し唱和」が一方的に始まった。

「唱和」が意図するもの

かつて（今でも？）多くの企業で「唱和」が取り込まれていると聞く。その中身は様々であり、社訓であったり、目標であったり、営業の取り組みであったりと様々であることを聞く。声を張り上げ、統一した行動をとる。そこには企業としての意図が見え隠れする。職場の風土を変え、会社に対する社員の意識を変える。精神論的な意味が大きい。

労働災害の根絶

労働災害の根絶に向けて、いささかも意義を唱えるつもりはないが、現場の声を聞き、労働作業、労働環境、ゆとりのある作業方法、作業に適した要員の確保を構築していく必要がある。個人の責任に転嫁するだけでは真の解決策とは言えない。

開局以来、職場の増員は労使共通の認識だったはずだが、3月期の増員要求に対して会社は「要求には応じられない」との回答を示してきた。今後その内容について確認をしていかなければならないが、過重な労働環境も労働災害の原因へと繋がるひとつでもある。

トップダウン

昨年、かんぽ生命保険契約の問題でグループ全体に大きな衝撃が走った。特別調査委員会の見解で「重層的な組織構造の中で、郵便局の現場で発生している不適正募集の実態が把握できていなかった。民営化以前から存在した上位下達の組織風土の中で、内部通報を含め、現場の声が経営層に届かない組織体制だった」と指摘している。

いま、職場では風通しの良い職場環境が必要である。